

目指す学校像	「遊ぶように学び、学びながら暮らす児童」が集い、共に学び合う学校
--------	----------------------------------

重点目標	1 義務教育9年間を見通したカリキュラム・マネジメントによる学びの高度化の推進 2 一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を大切にする学びの「時間」と「空間」の整備 3 探究的な学びを地域全体で支えるスクール・コミュニティの実現 4 学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての教職員の育成
------	--

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成	(8割以上)
	B	概ね達成	(6割以上)
	C	変化の兆し	(4割以上)
	D	不十分	(4割未満)

学校自己評価						学校運営協議会による評価		
年度目標				年度評価		実施日 令和5年2月13日		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	<現状> ○学習指導要領、さいたま市小学校教育課程編成要領等に基づき、適切に教育課程を編成・実施している。 ○「さいたま市小・中一貫教育」を推進し、一小・一中の地の利を生かして、円滑な接続を図るための取組みを行ってきた。 <課題> ○社会状況の急速な変化や児童の多様化に応じるために、ICT環境を最大限活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが求められる。 ○教科指導の専門性をもった教員による教科担任制を導入し、各教科等の系統性等を踏まえた学びの高度化を図ることが重要である。	「学び方(ラーニングスキル)」の習得による「学びの自律化」の実現 小学校教育と中学校教育をつなぐ「架け橋」を重視した教科担任制の実施	①西原中学校と協働で義務教育9年間を見通した「ラーニングスキル」を選定する。 ②学びの基盤となる「情報活用能力」の指導の系統化を図る。 ③音楽専科教員の学級担任配置、体育専科教員の配置を行い、効果的な実施方法の知見を蓄積する。 ④「さいたま市小・中一貫教育」の推進に係る兼務教員が継続的に授業に参加することで、中学校のもつ実践的な知識や方法論を導入できるようにする。 ⑤西原小・中学校で連携した学校行事を可能なところから実施する。	①各教科において「学び方(ラーニングスキル)」の系統表試案を作成することができたか。 ②「情報活用能力」の学年別指導計画を作成することができたか。 ③「さいたま市小学校教科担任制」の令和5年度全面実施に向けた実施計画を立案することができたか。 ④西原中学校の教員と効果的に連携を図って指導する授業を実施することができたか。 ⑤西原小・中学校で連携した学校行事を複数回実施することができたか。	①各教科において、小学校段階の「学び方(ラーニングスキル)」の系統表試案を作成することができた。 ②ICT教育部において、「情報活用能力」の令和5年度学年別指導計画を作成中である。 ③令和5年度は、「さいたま市小学校教科担任制」を完全実施予定である。 ④西原中学校の数学、音楽、美術、家庭の教員が、年間を通して当該教科の授業に入り、専門的な視点から学習の支援を行うことができた。 ⑤西原小・中合同の引き渡し訓練、西原中合唱祭への音楽担当教員の派遣、つばみの日を実施した。西原中学校のボランティア活動として、剪定枝の片付けを実施した。	B	作成した試案に基づき、「学び方」「情報活用能力」の習熟を図る授業づくりに取り組む。特に、授業の中で児童が選択する機会を多く設定し、自律的な学習を促進できるようにする。 「さいたま市小学校教科担任制」を円滑に実施することで、中学校の指導体制のよさを小学校に取り入れるとともに、小・中の学びの連続性を強化できるようにする。 西原小・中学校の児童生徒が、まるで一つの学校のように交流できる教育活動の実施を目指す。	小学校と中学校の協力関係が醸成されてきており、早くから情報が共有されることは、児童にとって有難いことである。 西原小・西原中の地の利を生かし、実技教科において中学校教員の指導が行われるのは、児童にとってよい学びのイメージにつながり、効果的と考える。 今後も小・中の連携を深め、協調的な学びや自分で問題解決する学びを続けてほしい。 また、ICT教育の充実に向けて、物的、人的な整備が必要と感じる。
2	<現状> ○コロナ禍3年目となり、感染症対策を徹底して児童の健康を守りながら教育活動の充実に取り組んでいる。 ○地域や家庭の協力を得ながら、防犯や交通安全の取組みを組織的・計画的に推進している。 <課題> ○コロナ禍による社会不安の増大など、児童を取り巻く課題が多様化・複雑化している。人と安全・安心につながるができるセーフティネットの役割を果たすため、特に「学びの中に自分の居場所があること」を重視し、心の健康を保障する環境整備が急務である。	自律的に学習を進めたり学習の悩みを相談したりできる学習スペースの整備 「ラーニングセンター」としての学校図書館の整備	①学年多目的室を自主学習ルームとして整備し、授業中や休み時間、放課後等に児童が自主的に使用できるようにする。 ②SCやSSW、関係機関と積極的な連携することで、様々な困難に直面し、学校や教室に行きづらい児童の学びの場を整備し、運用を開始する。 ③図書ボランティア「しゅーぼん」や図書委員会の児童と連携し、読書活動の充実や読書環境の整備を図る。 ④児童の知的好奇心を醸成する開かれた学びの場として整備するため、令和5年度の第2図書室設置に向けて準備を行う。	①自主学習ルームを4か所設置し、児童が日常的に使用する状況になったか。 ②学校や教室に行きづらい児童のための学習スペースを整備し、必要に応じて使用できる状況になったか。 ③季節や年中行事に応じた読書活動の取組や読書環境の整備を行うことができたか。 ④第2図書館の設置に向けて、児童や保護者の意見を取り入れて、準備計画を立案することができたか。	①3～6年生それぞれに自主学習ルームを設置し、授業において、少人数指導等に活用し始めている。 ②学校や教室に行きづらい児童のための学習スペース(通称オアシスルーム)を整備し、対象児童のベースに於いて、オンライン授業に参加したり、個別の課題を行ったりしている。 ③読書月間等に合わせ、読書キャンペーンや読書紹介、読み聞かせを行うことができた。年間を通じて、図書ボランティア「しゅーぼん」の方々に、季節感あふれる読書環境の整備が行われた。 ④現在の図書館を隣室まで拡張する形で、令和5年度当初からの運用開始予定である。	B	整備した自主学習ルームを活用して補習や学習相談を行う等、児童の学習不安の解消に資する取組を推進する。 オアシスルームの周知を図り、家庭と学校をつなぐ踊り場としての機能を充実する。 図書委員会の児童や図書ボランティア「しゅーぼん」の方々の意見を取り入れながら、児童の知的好奇心を醸成する開かれた学びの場として、学校図書館活動を推進する。	コロナ禍の生活変化で、児童の心身が不安定になることもあったが、先生方が友達に相談しやすい環境づくりを実施している。楽しく学校生活を送っている児童の姿は、大人にも力をくれた。 時間や環境の整備は進んでいる。個々に考えをもつ児童が有意義に使用していくとともに、多様な幸せを認めることへの教育や啓蒙が必要と考える。 また、集団の中だからこそ学べることも経験してほしい。
3	<現状> ○地域の各自治会やPTAの協力を得て、学校安全ネットワークを構築するとともに、民生委員・児童委員と連携を図り、多面的な視点から児童の見守り活動に取り組んでいる。 ○開校当初より、郷土学習として、全校児童が岩槻の人形づくりを行い、伝統となっている。 ○西原小チャレンジスクールでは、コロナ禍ではあるが、岩槻児童センターと連携しながら、熱心に活動が行われている。 <課題> ○昨年度行われた学校運営協議会準備委員会による準備に基づき、コミュニティ・スクールをスタートし、初めの一步として、学校を核とした地域づくりに向けた目標を設定する。 ○郷土学習を現代的な諸課題に応じて、探究的な学びとして再構築し、教育課程に位置付ける。	学校運営協議会において目指す児童生徒像(学習者像)を共有 地域人材を講師に招き、「岩槻を題材とした探究的な学習」の実施 チャレンジスクールと連携した「多様な学びの場」の設定	①西原小・中学校合同のコミュニティ・スクールを円滑にスタートし、学校運営協議会において「目指す児童生徒像(学習者像)」について熟議を行う。 ②総合的な学習の時間において、「岩槻の人形」をテーマとし、地域の人形店の職人を講師とした「人形づくり体験」を中心とした探究的な学習を実施する。 ③チャレンジスクール実行委員会と連携して情報交換を行い、児童にとって安全・安心な第3の居場所づくりに取り組む。	①西原小・中学校コミュニティ・スクールの「目指す児童生徒像(学習者像)」を策定することができたか。 ②「さいたま STEAMS 教育」や「さいたま SDGs 教育」と関連を図った「岩槻の人形」をテーマとした探究的な学習の全体計画や学年別指導計画を作成することができたか。 ③チャレンジスクールの実行委員や図書ボランティア等が日常的に活動できるスペースを整備できたか。	①第2回学校運営協議会において、「西原小学校・西原中学校で育みたい学びの姿」をテーマとして熟議を行った。 ②森田人形店と連携を図り、岩槻の人形づくりに係る体験学習を実施した。「岩槻の人形」をテーマとした令和5年度総合的な学習の時間(STEAMS TIME)年間指導計画を作成中である。 ③児童と地域の方が気軽に交流できることを目的とした「コミュニティルーム」を設置するため、関係者を集めた検討会議を開催した。令和5年度当初からの運用開始予定である。	B	自動会話プログラムやイラスト自動生成ツールなど、AIの実用化の進展による社会環境の変化を踏まえながら、引き続き「目指す児童生徒像(学習者像)」について熟議を深める。 人形づくりに加えて、岩槻を題材とした新たな探究課題を開発し、児童の興味・関心を追及できる体験的な学習の実施を目指す。 コミュニティルームの運営を軌道に乗せ、児童と地域の方が交流したり、互いに学び合ったりできる機会を継続して設定できるようにする。	小・中合同のコミュニティ・スクールのスタートにより、これまでできそうではなかった連携や協力の形が見えてきた。今後も地域とのつながりを大切し、地域の方々や関係団体との関係を積極的に深めてほしい。 地域の伝統である人形作りについて、1年生から6年生まで取り組んでいるのは、西原小だけである。引き続き、地域ならではの探究課題に関心をもって学べる環境について、取り組み続けてほしい。 地域交流のプラットフォームとして、地域の方と児童がふれあう機会を設けていきたい。
4	<現状> ○教員の約半数が、経験5年前後であるが、経験豊かな教員と協働する中で、互いに学び合い、支え合いながら資質向上に取り組む風土がある。 ○GIGAスクール構想により整備されたICT環境を活用した授業や業務遂行が日常的に見られる。 <課題> ○小学校教科担任制の導入もあり、各教員にとって拠り所となる教科を1つもち、自信を深めながら指導力を向上していくことが重要である。 ○ICTの効果的な活用により、各教職員の経験や技を可視化することで、組織力をより一層高めることが求められる。	一人1教科選択制による「学び合う」学校課題研究の実施 ICTを活用した業務の透明化と標準化の推進	①各教員が研修を深めたい教科を選択し、西原中学校の教科担任と合同のチームを組織して、相互授業参観や教材研究を行う。 ②全教員に対して、「よい授業」による授業評価と管理職の授業参観に基づく「1on1面談」を実施する。 ③エバンジェリストによるICT活用研修を隔月で実施し、教職員のICT活用能力のブラッシュアップを図る。 ④ICTツールを活用して、各教職員の経験や好事例等を共有することで、業務の効率化を図る。	①教員対象のアンケートで「深く探究したい教科がある」と回答した教員の割合が85%以上となったか。 ②全ての教員が「1on1面談」を通して、自身の授業づくりの目標を具体的に持つことができたか。 ①ICT活用能力調査で90点以上の教員の割合が90%以上となったか。 ②Teamsや校務支援システムを使用した情報共有が日常的に行われるようになったか。	①教職員用学校評価アンケート「一人1教科選択制による「学び合う」学校課題研究の取組から「深く探究したい教科」を見出すことができた」の質問項目に肯定的に回答した教員の割合は88%であった。 ②管理職が、短時間ながら、毎日毎日全ての学級の授業を参観した。人事評価面談等を通して、よりよい授業づくりに向けた取組みを行った。 ①ICT教育推進担当教員を講師としたICT活用研修を5回実施し、楽しみながらICT活用能力の習得を図ることができた。 ②教職員間で、Teamsのチャット機能や校務支援システムの「児童の気付き」入力システム等を使用した情報共有が日常的に行われている。	B	学校課題研究のステージを理論研究から実践研究に進め、教科別チームによる小・中相互授業参観を繰り返すことで、実践的指導力の向上を図る。 さいたま市教育委員会による「さいたま市小・中一貫教育」の研究発表会を成功させる。 学校の配布文書の電子化や欠席連絡のデジタル化などは進んでいる。ICTの活用により日々蓄積される教育データと教職員の経験を掛け合わせることで、教育活動の更なる改善を目指す。	限られた時間の中で、教職員が積極的に研修していくことは、大変有難いことである。 小学校教科担任制が導入される中、教員が1教科を探究する専門家となり、小・中で相互授業参観する仕組みは、効果的と考える。小・中の教職員が情報や意見交換を行うことで、小・中一貫教育の目指す方向性が決まってくるものと期待できる。 教職員の雰囲気は、児童に必ず伝わる。教職員が「やり甲斐」「働き甲斐」を感じられる職場であることを願う。